Leys d'Amors
中世オック語の Bon Usage

茂　山　さえ子

Leys d'Amors（＝Lois d'Amours「愛の法則」）は14世紀前半にトゥールーズで書かれたオック語による「詩論」，あるいは詩作の手引書である。着手は1320年代，最終的な完成は1356年であったが，採録されているのは13世紀の吟遊詩人（antic trobar）の作品であることから，後世のわれわれにとっては13世紀のオック語を解読するためのこの上ない文法書の役目をはたしている。ここでは，J. Anglade が L'Académie de Jeux-Floreux 所蔵3巻版を編集・復刻する際に付した解説・研究(1)をもとに，Leys d'Amors（以下 Leys と略称する）成立の経過，及びその意義を考えてみたい。

14世紀の人々になぜ前世紀の吟遊詩人の「詩論」が必要であったのか。12，3世紀，オック語は俗ラテン語の中でも最も重用された言語であり，また優れた文学作品が多数作られた。繊細な恋愛心理を題材にした詩が作られ，歌われたのもこの時期の南仏各宮廷においてである。ところが，13世紀後半に入ると，パリを中心としたフランス王国（当時の「フランス」には現在の南フランスは含まれていなかった）の勢力伸張により，南仏の宮廷は政治的に弱体化し，その言語，文化も徐々に力を弱めた。オック語による文芸の主要な担い手であった吟遊詩人たち（trobadors）は拠る辺を失って，創作の力を失いつつあった。

このような状況下で，トゥールーズの詩の仲間が，オック語の詩の伝統に活気を取り戻すことを発念した。彼らはオック語地域各地の吟遊詩人をトゥール

ーズに招き，詩のコンクールを開催することを思い立つ。

彼らはまず Consistoire du Gai Savoir（詩学協会）を設立し，その運営者となった。Gai Savoir，すなわち陽気な，明るい学問とは，シリアスな神学・哲学に対し，詩についての学問を指して彼らが用いた用語である。「詩」は楽しいもの，それは彼らの基本理念である。

彼らとは，Bernard de PANASSAC, Guilhem de LOBRA, Berenguier de SANT PLANCAT, Peype de MEJANASERRA, Guilhem de GONTAUT, Pey CAMO, Bernard OTH の7人である。彼らは自らを La sobregaya Companha dels VII Trobadors de Tolosa（トゥールーズの7人の吟遊詩人からなるとびきり陽気な集団）と称した。この7人のうち，Panassac は貴族階級の出身である。他は，Lobra が富裕階級（bourgeois），Sant Plancat と Mejanaserra が両替商であり，Gontaut と Camo は商人，そして，Oth はトゥールーズの下級裁判所の公証人であった。この集団の中に貴族階級を示す人物は一人しか含まれていない。それも決して宮廷を率い，権勢を誇るような大貴族ではない。常に Sept seignors（7人の殿方）のひとりにすぎない。他の6人について言えば，彼らは詩人であると同時に市中で日常生活を送る職業人でもあった。この人々には殆んど伝記が残っていない。Panassac だけが一篇残しているばかりである。

B. Panassac は Arrouède の領主であった。その所在地は Panassac の近辺，Masseube 県，Mirande（Gers）郡で，嘗て Astarac 伯爵領であった。Panassac は詩人でもあったが，むしろ，武人であり，刺客のようなこともした。また，かれの城はトゥールーズ周辺ばかりではなくフランス王国から駆け込む犯罪者の逃げ込み場所（asile アジール）になっていた。

アジールに関しては阿部謹也氏の「アジールの思想[2]」で仔細に述べられている。時代と地域による差異はあるにしても，そこは単に犯罪者の集合所ではなく，社会との約束事によって成立している，特異な囲みであり，権力に対して抵抗を示す，あるいは抵抗のために力を寄せる場であったらしい。したがっ

て Anglade も言うように，Panassac の行為には，重圧を増す北の王国の支配に対する抵抗，封建主義に対する批判を読みとることもできる[3]。

協会の運営者である7人は当然のことながら詩作をしたものと思われるが，彼ら自身の作は，Panassac の手になる2編を例外として，われわれの手に残されていない。

彼らは1323年，万聖節の次の火曜日に，トゥールーズの町の城砦（barri）にある果樹園の月桂樹の下に集まり，「オック語領域に住む詩人すべて」に手紙を書き送った。

Donadas foron el vergier
Del dit loc, al pe d'un laurier
El barri de las Augustinas
De Tholoza, nostras vezinas,
Dimars, quar no-s far enans,
Aprop la festa de Totz Santz,
En l'an de Encarnacio
De Crist, nostra redemptio
M. e CCCe. .XX. e .tres.[4]
（それらのことは，いつもの場所，
われわれの所から近い，トゥールーズの
オーギュスタンの城砦の，
果樹園の月桂樹の下でなされた。
万聖節の次の
火曜日に，なぜならそれより早くはできないから。
我らが贖い主，キリストの
生誕より1323年目の。）

手紙の内容はオック語領域の吟遊詩人を翌年，トゥールーズに招く，招請状であった。

El dic loc serem, si Dieu platz,
Lo prumier jorn del mes de may
E serem ne mil tans plus gay

Si-us hy vezem en aquel jorn[5]
(神の御心に叶うならば，その場所に集うでしょう，
5月1日に。
そして，われわれは千倍も陽気になるでしょう，
もし，その日，そこにあなたの姿を見るならば。)

そして，手紙に書かれた通り，1324年5月1日にトゥールーズで協会の催す第1回のコンクールが開かれる。Leys の記すところによれば，当日大勢の吟遊詩人が応募をし，彼らは主催者である7人によって丁重に迎えられた。

Al qual jorn assignant vengro de diversas patidas mant trobador am lors dictatz en lodit loc, on foron receubut mot honorablamen per les ditz VII senhors[6]
(その定められた日に，いろいろな地方から，大勢の trobadors が自作の詞を持ってその場所に集まった。そこでは，7人によって非常に敬意をもって迎えられた。)

1日目は応募者の受付に費やされた。選考は2日目であった。応募は書いたものを提出するだけでなく，それを「歌う」か或いは「朗唱」することと定められていたから，当日は様々な詩が歌われ，朗唱されたと思われる。3日目に第1回コンクール優勝者として Arnaut Vidal de Castelnaudary に約束の優勝賞品「黄金のスミレ」が授与された。このコンクールには貴族，市の有力者など大勢が臨席した。そして，以後，賞品の「スミレ」は市が費用を負担する提案がなされるなど，この催しと協会は公的な後ろ盾を得て，その存在を確固たるものにした。近代的アカデミーの発祥である。

1323年以降，協会は定期的に集会を開いた。そのための場所を確保し，かなりの人数の固定会員と会を象徴する印を持つようになった。

このようにして，協会は設立されたが，会則はまだできていなかった。また作品を募り，批評はするが，若い吟遊詩人を教育し，指導する体制にはなっていなかった。それに必要な「規範」，指導要項というべきものを持っていなかったからである。「会則」も独自の「規範集・辞書」も持たないアカデミーは想像し難い。そこで，協会の指導者たちは，法学に通じた Guilhem Molinier

にその「規範」の作成を要請する。法学博士（doctor en leys）Bartholmieu Marc の助言を受け，必要のあるときには協会に意見を求めることができるという約束になっていた。この時の依頼は口頭でなされたと思われる。

依頼を受けた Molinier は比較的短期間のあいだに小論文を仕上げ，協会に提示した。この書が Leys d'Amors と名付けられたのはこのときである。

> E cant las ditas reglas foron faytas en partida, le dit VII senher volgro que fossan appeladas LEYS D'AMORS.(7)
> （そして，かの基準が部分的に出来上がったとき，7人はそれが Leys d'Amors と呼ばれることを望んだ。）

しかしながら，その論文はあまりにも短く，整理も不充分であった。上の記述に続いて，

> En las quals far covenc metre gran trabalh e gran estudi.(8)
> （そして，これを作成するためには多大の作業と研究を必要とした。）

と記したのは，些か言い訳めいて聞こえないでもない。

この上記中の，... cant las ditas reglas foron faytas en partida「その基準が一部出来上がったときに」はわれわれの目を惹く記述であり，これはその直後の記述，

> ... e per so las ditas LEYS fosso per certas rubricas ordenadas e per certz libres devizidas, quar a penas abra noela se pot far al comensamen ayssi del tot complida ...(9)
> （この Leys が，手を加えられ固定した何巻かに分けられて，定まった表題の下で編集されるように。なぜなら，さまざまに苦心してこそ，欠落部分のない完全なものを作ることができるのだから ...）

に結び付き，この書の初版が部分的なものであったこと，そして協会はそれを改訂・充実して行く意志を持っていたことを示している。

この後数年の間に，協会はバカロレア・博士号の設置など，人材養成のための制度を定めた。その後改めて，Leys の改訂に着手する。初版の時代と異なり

権威を持つようになった協会は，この度は形式ばった依頼書を認め，Molinier に手渡す。Molinier もまた勿体ぶった書面で受諾を伝える。こうして新たな編集作業が始まった。今度は編集のために複数の acosselhars（助言者），coadjutors（助手）が仕事に加わることになった。用例や語彙収集などの実務的作業は助手たちに任せ，Molinier は字義どおり編集作業にのみ携わったようである。

1356年に完成が公にされた。Leys の出版はオック語地域全土の王侯貴族には手紙で通知され，有力な富裕階級の人々，学者，商人さらには詩を理解し，楽しむ者であれば職人にまでも知らされた。

Et es aussy la fons publica
Qu'a lunha gent, paubra ni rica
No's defen, que de l'ayga vuelha.[00]
（これ［＝Leys］は，望みとあらばどなたにも，貧しいものにも富めるものにも水を与える公の泉であります。）

このように，広く公開され，写しを取ることや書き換えることも許可・奨励されたため，Leys には異本・抄訳本も含め，写本が多数残されている。それらの比較研究は今後のおおきな研究課題である。

中世オック語を，ほぼ同時代人の手でオック語を用いて分析・解説した書は Leys の他に類がない。

正統のラテン語が辺地において俗化し，品格を失った形態，即ちラテン語の下位の存在としかみなされていなかった言語の中に一貫した整合性を認め，独自の規範を提示し得ることを明らかにして，ラテン語への隷属から踏み出さしめたという点で，Leys は意味の大きい記念碑である。また，われわれにとってはその特異性希少性のゆえに貴重な文献である。しかしながら，当の協会や著者は独創的な書物を作り出そうとした訳では決してなかった。むしろ，協会は，当時既に評価の定まったていたラテン語の修辞に関する書物の記述を踏襲

することで，Leys に権威と説得力を与えようとしたようである。著者自身も同様に，自分自身の（裏付けのない）言い分ではなく，「聖人や古き作家たちの言葉，碩学たちの権威にのみ基づいて，述べる所存である。」と明言している。

> ... per so nos presen tractat de nostre sen del tot far no podem, si donx no recorrem a Dieu et als Sans et als digz d'aquels als quals Dieus ha donada sciensa e sen.[11]
>
> （それゆえ，何事についてもわれわれの（ひとりよがりの）知識から記述を成すことはできない。神や聖人の言葉，または神がすでに学識と知識を与え給うた言辞によるのでなければ。）

Leys の著作方法は，多くの中世の文筆家が用いたのと同じ方法である。つまり，オリジナリティの所在をほとんど忖度しない。特に教授を目的として記される書物の中ではそれが著しい。著作の成否は一に手本たる書物の選択にかかっており，そしてそれを完膚無きまで剽窃し尽くす腕によっていた。Molinier も同時代の学者・作家と同様，Leys の中に古代作家や教皇たちから借用した格言や諺を引用している。

その例は Leys の中に枚挙のいとまがない。セネカ，キケロ，カトー，サロモン等が好んで取り入れられている。

> E *per so ditz Seneca* : So que tu no pot celar ...[12]
> e *per so ditz Seneca* que lay on longamen fier le focz la vapor ...[13]
>
> *Tullis ditz que* al comensamen can las gens vivian a ley de ...[14]
> E *Tullis ditz que* ≪paors ni dolors, ni mortz ni lunha cauza de ...[15]
>
> e *per so ditz Catos* que a son companho humil e suau, ...[16]
> Et ayssi pot haver loc so que *ditz Catos que* ≪contra aytals ...[17]
>
> quar *Salamos ditz que* hom no deu parlar am fol home, ...[18]
> e per *so ditz Salamos* : ≪No vuelhas reprendre escarnidor per que ...[19]

しかし，中世においては，本来ラテン作家のものではない文がしばしば大作家の名の下に流布していたことに留意しなければならない。Leys 中に見られる（伝）セネカの文の半数以上中世の作家によるものである。そのひとり，Sant Martin de Braga は正統なセネカ研究者でもあったが，同時に自身の言辞をセネカで権威付けて自著に記すこともした。Leys には更に Albertano de Brescia を仲介にして取り入れられたようである。[20]

他の作家についてもほぼ同様である。セネカと並んで多数引用されているキケロも Albertano を経て，また一部は Brunetto Latini の Trésor を介して取り入れられたものであると思われる。

ギリシャ作家からの借用は多くないがゴルギアス，イソップ，アリストテレスなどが取り上げられている。

> Trobada foc esta sciensa per Grecz, segon Yzidori, sos assaber per Gorgias, Aristotil ...[21]
>
> （この学問は，Isidore de Seville によれば，ギリシャ人によって，（つまり）ゴルギアスやアリストテレスの知識によって見出されたものである。）
>
> E *per so dits Yzop* : Ne confidatis secreta nec hus detegatis ....[22]
>
> e d'*aquesta ditz Aristotil* qu'es mala ; ...[23]
>
> E *Socrates ditz que* ≪so qu'es lag per far no es cauza honesta ...[24]

おそらくこれらも原著からではなく他の中世作家の書物を経由して取り入れたものであろう。

Leys は古典作家ばかりではなく，多数の先輩文法家から多くの着想を得，またそこから引用している。

先に名を掲げた Brunetto Latini はイタリア人であるが，1265年頃フランス語で Livre de Trésor を記した。これは幅広い内容の百科事典であり，その第2巻で道徳と修辞学に広く紙幅を割いている。現存する複数の写本の中にオック語に訳されたものは見当らないが，幾つかの手稿に用いられた言語に，少なくとも綴りの点で，オック語と類似が認められる。

Latini もまた，自著は「自分の乏しい認識や知識によるものでなく，先人作家の優れた言葉だけを取り入れている」と述べ，実際，修辞学について，キケロの Rhétorique 及び De Inventione から頻繁に借用している。Leys の著者は数ページに渡ってほぼ逐語的に Trésor を写し取っている。双方が共通の書物から引用したと考えられなくもないが，類似の程度から推し測って，その可能性は非常に薄いと言わなければならない。

また，書中に引用の旨を個々に明示せず，また典拠の著者名を掲げていなくとも，Molinier が同時代に大学で教授用に用いられていた Grécisme, Doctrinal[25] などの書名やその著者の名を知らなかったはずはない。Molinier はそれからの引用の上に，自らの考察と新しい展開を加え，Isidore de Seville で権威付けをして，自著の見解としている。

> Rethorica, *segon Yzidori*, es sciensa de dir be e eloquenci copiosa.[26]
> *per so ditz Ysidori que* en cauzas petitas leugieramen deu hom parlar[27]

その他，直接の引用はさほど多くないが，分析や整理の方法に Priscien, Donat 等の影響が明らかである[28]。

Leys は詩に相応しい言語を従前どおりラテン語の規範で定めることを試みた。しかし，扱おうとする言語は最早ラテン語と同じではなく，当然のことながらそれでは規定し切れなかった。たとえば，動詞の法と時制について，実詞の形態と統辞についてラテン語文法の中にはこれらの事柄を説明する項目はない。Molinier はこの膨大な「規定外事項」を杓子定規に放擲せず，また，夥しい実例を無闇に並べあげることを避けて，代わりに，そのなかにある何かしらの共通性・規則性を探り当てようとしているようである。

Leys 以前に，オック語文法に関する記述が全くなかったわけではない。Leys はそれらも積極的に取り入れようとしている。

> et tenem per anticz totz los dictatz faytz denan la publictio d'estas nostras

Leys d'Amors[29]

（そして，われわれは，嘗て書かれたものをこの我らの Leys d'Amors を世に出す前に参照する。）

オック語を記した文法書として最も古いと思われるものは，12世紀末か13世紀初頭に，カタロニアの詩人 Raimon Vidal de Besalu によって記された Las Razos de Trobar であるとされている。カタロニアでは13世紀に至るまで詩作にはオック語を用い，トゥールーズの詩学協会のコンクールにも2度優勝者が出ている。Vidal はその書の前書に《ほとんどの人が見出す（trobar）ための正当な方法を知らない。それゆえ，どのようにして発見のための本当の道を辿ればよいのかを知りたいと思っている人々に，吟遊詩人たち（trobadors = 発見者たち）が最もうまく発見し，最もうまく教えてくれた事柄を紹介し，知らしめるためにその書を作りたいと思う》と述べている。長い前書の後の本文では実詞・形容詞の形態論，曲用変化，代名詞，動詞を扱っている。この書は書名と意図からすると詩論であるが，押韻の例示や分析はごく表面的で実際にはごく簡略な文法書である。ただ，例には，彼もまた《すぐれた吟遊詩人》の残した詩を好んで用いている。その書がオック語に訳されたかどうかは不明であるが，オック語地域には広まらず，専ら Vidal の生地であるカタロニアで読まれたようである。

ふたりのイタリア貴族のために書かれた Donatz Proensals は Razos よりもはるかに詳細である。これを書いた Uc Faidit は《私以前には誰もこの主題についてこのように完全に整理していないし，このように正確に詳細を示したものはいない》と述べている。動詞に関して，Razos よりも多様な例を取り上げ，詳しく述べている。末尾には，開母音・閉母音を明確に区別して，押韻の例を豊富に挙げている。Molinier はこの書物についても，内容を知っていたと思われる。名詞の形態や動詞の用法に共通の見解が見られるほか，両者の間には，多数の細かい共通の事項が見られる。しかしながら，Donatz には独断的な見方も少なくなく，Leys の目指す，中庸で幅広い視点による指南書の主たる底本と

してはふさわしいものではなかった[90]。

その他，1324年，つまりトゥールーズで第1回のコンクールが開かれた年の9月に，Doctrinal de trobar と名付けられた小冊子が出されている。コンクールの応募者向けのガイド・ブックであろうことは容易に想像できる。6節・543行の短いものであるが，著者 Raimon de Cornet は，後日 Leys がするのと同じように，評価の高い，過去の吟遊詩人の例を挙げ，その語法と語形を手短かに示している。この書は後に，Joan de Castelnau によって手厳しく批判される。Castelnau は1341年，Doctrinal に註釈を付ける形で Glose を記し，その中で，Leys の記述を論拠として，Cornet の記述の浅薄さを指摘した。これが出典が Leys であることを明示した最も古い引用である。

先にも述べたように，Leys は公開を前提として編纂され，閲覧や書写が奨励されたため，少なからぬ写しが取られ，各地に流布したものと思われる。その影響は南フランスの外にも及んだ。

南フランス以外で，Leys が最も深く受け入れられたのはカタロニアであった。Razos が同地で書かれ Doctrinal de Trobar, Glose が共にアラゴン王 Alfonse 4世の王子 Pedro に捧げられているように，12，3世紀カタロニアの言語はオック語と似通っていた。14世紀に入っても，詩作にはオック語に近い言語を用いていた。

1393年アラゴン王室はトゥールーズの詩学協会と同様の組織をバルセロナに設立することを命じ，1398年，1413年には資金を提供して賞の設定と詩作のための教授用書籍の翻訳を促した。この時に写された散文版の手稿は G. Arnoult が底本とした5巻版と共通の原本から取られたものと推定され，多くの共通部分があるが，5巻ではなく6巻に分けて仕立てられている。さらに，Leys を縮約し，韻文で写した手稿，Flors del Gai Saber が残されている。これはこの版で現在保存されている唯一の手稿である。先の散文版とともに，バルセロナの古文書館（Archives de la Couronne d'Aragon）に保存されている。

カスティリア，ポルトガル地域へは影響が及んでいないようである。それら

の言語による詩の中にはオック語の影響がまったくないか，関連を感じさせる場合も，カタロニア語を経由して取り入れられたものと思われ，その関係は極めて希薄である。

また，後のフランス語であるオイル語の地域では，Leys に殆ど関心を示さなかった。南部出身の作家の作品に微かにそれらしい影がみえる程度である。

1539年，オック語は公文書からラテン語を追放することを目的として発布されたヴィレ・コトレ法のいわば巻き添えの形で公の立場を追われることになるのだが，言語上の硬直化が見え始めた13世紀末から16世紀まで弱体化しながらも，公的にも命脈を保ち得たことには，オック語の中に一貫した規範が存在することを明らかにし，拠るべき基準，Bon Usage を確認せしめたオック語文法書の存在も幾分か貢献したと思われる。Leys はそれらの原点であったと言えよう。

注

(1) LAS LEYS D'AMORS, Manuscrit de l'Académie de Jeux-Floraux; Bibliothèque Méridionale, éd. Edouard Privat, 1919. 第 IV 巻。
(2) 「アジールの思想」阿部謹也；「世界」1978・2。
(3) 注(1)に同，Anglade 版 las Leys d'Amors, 第 IV 巻19頁。
(4) ibid. Liv. I-p 12.
(5) ibid. Liv. I-p 11.
(6) ibid. Liv. I-p 13.
(7) ibid. Liv. I-p 15.
(8) ibid. Liv. I-p 15.
(9) ibid. Liv. I-p 15.
(10) ibid. Liv. I-p 40.
(11) ibid. Liv. I-p 69.
(12) ibid. Liv. I-p 90.
(13) ibid. Liv. I-p 91.
(14) ibid. Liv. I-p 83.
(15) ibid. Liv. I-p 99.
(16) ibid. Liv. I-p 90.

(17) ibid. Liv. I-p 92.
(18) ibid. Liv. I-p 91.
(19) ibid. Liv. I-p 92.
(20) ibid. Liv. IV-p 63.
(21) ibid. Liv. I-p 81.
(22) ibid. Liv. I-p 156.
(23) ibid. Liv. I-p 84.
(24) ibid. Liv. I-p 124.
(25) Grécisme, par Evrard de Bethune.
Doctrinal, par Alexandre de Villedieu.
(26) Anglade 版 las Leys d'Amors 第 I 巻82頁。
(27) ibid. Liv. I-p 116.
(28) ibid. Liv. IV-pp 84, 85.
(29) G. Arnoult 版 Las Leys d'Amors 第 III 巻28頁。
(30) Anglade 版 Las Leys d'Amors 第 IV 巻99頁。

テクスト及び参考書目

(1) Anglade, Joseph : LAS LEYS D'AMORS, Manuscrit de l'Académie des Jeux-Floraux ; Bibliothèque Méridionale, éd. Edouard Privat, Toulouse, 1919.
(2) Arnoult, M. Gatien : Monuments de la Littérature Romane, LAS FLORS DEL GAY SABER estier dichas LAS LEYS D'AMORS ; éd. Typographie de J.-B Paya, Toulouse 1842.
(3) Nelli, René et Lavaud, René : Les troubadours, Le trésor poétique de l'Ocitanie ; Bibliothèque européenne, Desclée de Brouwer, 2nd éd. 1960.
(4) Camproux, Charles : Histoire de la Littérature occitane ; Payot, Paris 1971.

(文学部非常勤講師)